【論文】

時間性の図式と自由
――ハイデガーの超越論的哲学をめぐって――

横地徳広

一　問題設定

ハイデガー『存在と時間』（一九二七年）を中心とした思考圏においては、その強調点に多少の変動があるにせよ、時間性が「存在論的な（ontologisch）超越」（GA24, 423）を介して「存在者的な（ontisch）超越」（GA26, 194）を意味づけるという超越概念の構図が成り立つ。すなわち、「存在者とかかわること」（GA24, 390）である存在者的超越の可能性の条件が存在論的超越であり、さらに、この存在論的超越の可能性の条件が「時間性の脱自的・地平的体制」（GA24, 429）である。ハイデガーは彼なりのこうした超越論的哲学のなかで「存在のテンポラリテート」（SZ, 19）という時間概念を提示していた。

このテンポラリテートは、『現象学の根本諸問題』（一九二七年夏学期講義、以下『根本問題』と略記）で論じられるところであり、存在了解の地平をあらわす時間性（cf., GA24, 323）、つまり、「脱自的時間性の地平的図式」（GA24, 418）であった。これは、現存在の実存の側からではなく、存在や世界の側から時間性にアプローチする試みである。「存在論の歴史の解体」（SZ, 19, vgl., GA24, 31f.）という課題に取り組むためには、そのようなテンポラリテートの問題圏において、「存在の学的解釈」と「時間現象」とが結びつくさまを解き明かさなければならない（SZ, 23）。こうした解明の手がかりとなったのが、カント『純粋理性批判』（以下『第一批判』と略記）の「図式論」である。というのも、超越をめぐるハイデガー独自の哲学的思考から図式論の「超越論的時間規定」を照らし出すことで、「時間と〈私は考える〉のあいだでの決定的な連関」をおおう「暗闇」が取り払われるからである（SZ, 24）。「このときあらわになるのは、存在者の存在にかんする解釈

が《世界》もしくは最広義での《自然》に定位していること、また、この解釈は実のところ、存在了解を《時間》から獲得していることである」(SZ, 25)。

では、ハイデガーのこうした問題意識において図式概念はいかなる存在論的機能をみとめられていたのか。

カントによれば、「超越論的図式」とは「カテゴリーのもとへの諸現象の包摂を媒介する超越論的時間規定」のことであった(A139 / B178)。ここにハイデガーは、存在者が存在者としてあらわになることと存在論的超越とを媒介する図式の機能を見出していく。この図式はハイデガーの超越論的哲学[1]にあって二つの存在論的機能をになう。それは、存在者を対象たらしめる「対象性(Gegenständlichkeit)そのもの」(GA3, 90)の時間的構造化と、世界の時間的構造化である。小稿では、図式機能のこうした諸相に注目しながら、ハイデガーの超越論的哲学が行き着くところを見定める。

まずは第二節において『根本問題』第一部を参照し、ハイデガーが「存在の根本分節化」と考えた「現実存在(existentia)」および「本質存在(essentia)」という二つの伝統的な存在概念が(GA24, 33)認識のカテゴリーとして働くことを確認する。そのうえで、『カントと形而上学の問題』(一九二九年、以下『カント書』と略記)の図式論解釈にそくして、実体概念にひそむ時間的意味を指摘し、またその「超越論的演繹論」解釈にそくして、対象性と本質存在の関係を探る。次に第三節では、『根本問題』第二部や『論理学の形而上学的始元根拠―ライプニッツから出発して』(一九二八年夏学期講義、以下『始元根拠』と略記)の第二部をとりあげ、「脱自態の地平的図式」と世界との関係を検討する。最後に第四節では、そうした地平的図式にみとめられた二つの存在論的機能を手がかりに、存在のテンポラリテートが時間性の自己関係構造を反映する具体的な仕方を確認し、ハイデガーの超越論的哲学における自由の問題に迫る。

*

「転回の思索」[2]に従うようになったハイデガーの自己解釈によれば、彼の超越論的哲学はカント哲学を形而上学として解釈することを通じて語り出されていたため、「主観性の形而上学」という色調を濃くし、ハイデガーの真意を正確に伝えることはできなかった。

とはいえ、以上のような考察から判明するのは、次のことである。すなわち、「形而上学の言葉」(GA9, 327f.)で語るならば、世界での経験を構成していく超越論的機能に対する存在論的究明をハイデガーはそのカント解釈においてつきつめ、結果、そうした超越論的機能の根源を現存在が自身から失うに至り、とはいえ同時に、現存在の奥底で世界にかかわる超越論的機能の源泉となる他者―時間性―と出会ったということである。これは、ハイデガーが近代超越論主義のなかで主観性にみとめられていた超越論的機能の極限に直面したことを意味する。まず、その極限として登場するのは「世界企投」(GA26, 247)という存在論的超越であり、「現存在は自由なものとして世界企投である」(GA26, 247)と述べられる。実存ではなく存在や世界の側から時間性を吟味す

るなかで脱自態の地平的図式にかんする議論は展開されていくが、そこでなお現存在に世界企投という最大限の力が見積もられている。しかし次に、この世界企投は、現存在が時熟させるのではない時間性、つまり、「みずから時熟する時間性」(GA26, 272)から条件づけられている。世界企投という最大限の超越論的機能は、現存在の存在意味でありながらもその他者である時間性それ自体とじかに接してその力を獲得し、こうした場面においてハイデガーは二つの自由のことを語り出す。

以下、ハイデガーによる超越論的哲学の徹底遂行を確かめたい。

二　対象性と図式

さてハイデガーは、『根本問題』第一部においてカント『第一批判』を判断論として読み解くさい、対象を規定する認識カテゴリーに伝統的な存在概念がひそんでいると言う。すなわち、第一に、「もの性(realitas)」に由来する「事象性(Realität)」概念を分析して、数学的カテゴリーのうちには本質存在という存在概念が流れ込んでいることを見出し、第二に、「現実性(Wirklichkeit)」概念を分析して、動力学的カテゴリーのうちには現実存在という存在概念が流れ込んでいることを見出す[3]。これら二つの認識カテゴリーは、ハイデガーの考えるところ、「この今」が中心に位置する「今継起」とみなされた非本来的時間にもとづいて了解される「事物的存在者(das Vorhandene)」の支配的な存在規定であり、「物在性(Vorhandenheit)」に包摂される。したがって、カント『第一批判』における「存在と時間」の問題とは、さしあたり本質存在および現実存在と今という時間様相との関係への問い、それゆえ、超越論的時間規定の媒介機能にかんする図式論への問いであったことがわかる。

では、こうした伝統的な存在概念は時間からどのような分節を受けているのか。この答えを図式論のうちに、しかも「有限的存在者の超越への根本的な問い」という存在論的な観点から確かめる必要がある(GA3, 89)。とくに『カント書』では、「超越の地平を形成するのは超越論的時間規定としての純粋図式である」(GA3, 198)と言われていた。この超越の地平とは、「あらゆる対象の可能的遭遇の先行的地平」である「対象性一般」のことである(GA3, 103)。したがって、純粋図式の問題は、対象の認識という存在者的な超越を可能にする存在論的な超越の次元に位置づけられている。ハイデガー独自の存在論的解釈では、「自発性」と「受容性」へと分化する超越論的構想力が純粋図式を形成することで、存在論的超越のむかう先である対象性の時間的構造化がなされ、この対象性の地平において対象の認識が可能になる[4]。

数学的カテゴリーを規定する伝統的存在概念は本質存在であり、動力学的カテゴリーの場合は現実存在であった。これらの存在概念は純粋図式を介して時間性と接続している。ハイデガーは「簡略粗野な解釈」と断りながらも、「関係」という動力学的カテゴリーの一つである「実体」の純粋図式をとりあげ、その存在論的解釈を例示している[5]。これは、端的に言えば、時間と現実存在との連関にかんする解釈である。内容を確認しよう。

「…時間はどの今(Jetzt)においても今(jetzt)であるという本質性格にもとづいて、いわば留まること一般(Bleiben

überhaupt）という視線を与える」（GA3, 107）。「しかし、今の継起としての時間は、どの今においても流れながら一つの今であることによって、そのつど別の今でもある」（ebd.）。こうして時間の留まることと流れることとが互いにからみあっていく。どの今も「この今」として留まる一方で、時間が流れることでそのつど異なった今が「この今」となっていく。このように流れながらも留まる現在一般という「視線」のもと、現存在は「時間におけるレアールなものの持続性」という「実体の図式」を形成し（GA3, 106 ; A143 / B183）、この図式にもとづいて、存在者が「変化において不変な存在者そのもの」として現実存在していることを了解する（GA3, 108）。実体概念を図式化し、変化にあって不変なもの一般という意味を存在者に与えることが、対象性の地平を企投することなのである。

つづいて、時間と本質存在との連関にかんする存在論的解釈だが、実のところ、これはハイデガーによる図式論解釈のうちには存在しない。本質存在と今という時間様相との関係をめぐる問いは、認識カテゴリーの図式化という観点からは検討されずに、超越論的演繹論第一版の「三重の総合」にかんする存在論的解釈のなかでとりあげられていく。その内容は以下のようなものである。

カント批判哲学にあって三重の総合とはそもそも直観の多様を見通し、結合させ、まとめあげることであった。ハイデガーの解釈によれば、最初に、「覚知としての純粋総合は〈現在一般〉を提供するものとして時間形成的である」（GA3, 180）。次に、「再生の相における純粋総合は既在性そのものを形成する」（GA3, 182）。最後に、再認の純粋総合は「この総合が同一なものとしてあらかじめ保持する或る存在者を探索するのではなく、あらかじめ保持すること一般の地平を探索する」（GA3, 186）。この探索は「将来の根源的形成」である（ebd.）。「現在一般」の「一般」、「既在性そのもの」の「そのもの」、「あらかじめ保持すること一般の地平」の「一般」や「地平」という表現が示しているとおり、ハイデガーの存在論的解釈のなかでは、対象性の時間的意味を形作るような時間性の脱自的地平が語り出されている。

しかも、再認の総合にかんする存在論的解釈にはもう一つ重要な側面がある。それは、端的に言えば、対象を同定するような対象性の地平を形成することにかかわっている。すなわち、ハイデガーは「非経験的…対象X」（GA3, 122 ; A109）のことを存在論的に解釈して、それを「対立するもの一般という性格をもつ或るもの」（GA3, 121）だと考える。この対立するもの一般が与えられたとき、対象性の地平が形成され、その地平において対象の同一性が確保される。こうした同定を保証しているのは、超越論的統覚の総合的統一である。すなわち、「対象が必然的とする統一は、表象の多様なものの総合における意識の形式的統一にほかならない」（A105）。ハイデガーの考えるところ、超越論的統覚の総合的統一に裏打ちされた対象の同一性は本質存在なのである。このようにして成立した同一的対象の本質存在が三重の総合のなかで時間的意味を与えられていく。

以上が『カント書』における「存在と時間」の連関であり、対象性への存在論的超越が時間的に構造化される仕方である。まとめれば、或る存在者が対象として現実存在することの了解は、実体の図式にかかわる対象性の地平から存在者の存在を了解すること

であり、すなわち、流れつつ留まる今から、変化において不変なものの存在を了解することである。また、対象の本質存在を対象の同一性として了解することは、超越論的統覚の総合的統一に裏打ちされながら、地平的時間から存在者の存在を了解することである。

＊

さて、以上のように対象性の地平を純粋図式によって形成する超越論的構想力は、『始元根拠』において『カント書』とは異なった相貌を見せていた。というのも、超越論的構想力は事物的存在性の一部をなす対象性ではなく世界への存在論的超越にかかわるとされていたからである。ハイデガーはこう述べている。

それゆえこのように、時間性の独特で内的な産出性は、その産物がまさに世界という独特な無であるという意味において示されている。〈主観〉のこうした根源的産出性とカントがはじめて出会ったのは、超越論的で産出的な構想力の教説においてである。（GA26, 273）

超越論的構想力は、カント批判哲学の枠内では〈主観〉の認識能力でありながらも、『始元根拠』によれば、〈みずから時熟する時間性〉である根源的時間に根ざして世界を産出する。これは、事物的存在者の総体という意味での「《世界》」（SZ, 65）ではない。では、このような議論において地平的図式はいかなる機能をみとめられているのか。次節で検討したい。

三　世界と図式

『存在と時間』第六九節 c「世界の超越の時間的問題」（SZ, 364）では、「世界の存在論的体制」（ebd.）をなす脱自態の地平的図式にかんする素描がなされていた。すなわち、「…脱自態には、脱出の〈行き先（Wohin）〉がぞくしている。脱自態のこの行き先を、われわれは地平的図式とよぶ。脱自的地平は、三つの脱自態それぞれにおいて異なる」（SZ, 365）。将来の地平的図式は、「自己のためにという目的性（das *Umwillen seiner*）」である（ebd.）。既在性の地平的図式は、「被投性が投げられているところ（das *Wovor* der Geworfenheit）」である（ebd.）。現持の地平的図式は、「～するために（das *Um-zu*）」である（ebd.）。「将来・既在性・現持それぞれの地平的図式の統一は時間性の脱自的統一にもとづいている」（SZ, 365）。

こうした脱自態の地平的図式は、実存ではなく存在のレベルにおいて世界の成り立ちを考えていくさいに問題とされる存在論的概念であり、『根本問題』においては、「プレゼンツ」という現持の図式的地平をふくむテンポラリテートとして（GA24, 443）、また『始元根拠』においては、「エクスタシス（脱自）のエクステーマ（脱自圏）」（GA26, 269）として論じられている。脱自態の地平的図式は、その呼ばれ方を変えながらも、それと世界との関係にかんする考察が積み重ねられていくわけである。『根本問題』では、次のように記されていた。

存在了解の可能性は以下のことに存している。すなわち、存在者との交渉を可能にする現持は、現持として、脱自態として、プレゼンツという地平をそなえている。時間性一般は脱自的に地平的な自己企投（Selbstentwurf）そのものであり、この自己企投にもとづいて現存在の超越は可能である。こうした超越のうちに、現存在の根本体制、つまり世界内存在もしくは気遣いが根ざしており、その気遣いは気遣いで志向性を可能にしている。（GA24, 443f.）

この引用で注目したいのは「脱自的に地平的な自己企投そのもの」という語句であり、これは、もはやそれを可能ならしめる条件へと遡りえない脱自的な自己根拠を意味している。『存在と時間』をふりかえれば、現存在は世界のうちへと投げ込まれていることである被投性を引き受けつつ、自身を存在しうることへと投げ込んでいく形で自己関係を築いていた。こうした自己関係構造は、時間性の脱自的な自己企投に裏打ちされている。というのも、時間性それ自体が「既在しつつ現持する将来（gewesend-gegenwärtigende Zukunft）」（SZ, 326）という自己関係構造をそなえており、その自己企投が「地平的」と形容されているのは、脱自態の地平的図式もまた自己関係構造をそなえているからであった。しかも、本来的な脱自的統一における将来の優位を、その地平的図式もまた反映している。つまり、「時間性の脱自的時熟が脱出の統一として有しているのは、一つの、しかも第一次的には将来から、目的性から時熟させられた地平であり、これが世界なのである」（GA26, 275）。

世界のテンポラールな構造化は将来を中心とした脱自態の地平的図式を介して遂行される。こうした地平的図式を形成する産出的構想力は、〈みずから時熟する時間性〉である根源的時間に根ざしている。その時間性にかんしてハイデガーは次のように述べていた。

時間性の地平のこうしたエクステーマ的統一は、世界の可能性の時間的な条件であり、その世界が本質的に超越へとぞくしていることの時間的な条件である。というのも、この超越はその可能性を脱自的な振動（Schwingung）の統一のうちに有しているからである。（GA26, 269f.）

「振動」とは時間性のいかなる動態だろうか。それは時間性の「脱自」が三つの脱自態において一挙に分化し統一する伸縮運動をあらわしている。「時間がそれ自身を伸ばし（erschwingen）、また縮める（verschwingen）」（GA26, 268）とき、現存在にはさまざまな世界が開かれるが、いずれの世界もテンポラールな構造をそなえている。というのも、「…エクステーマ的なものは、振動しながら、世界すること（ein Welten）として時熟する」（GA26, 269f.）からである。現存在はさまざまな世界に投げ込まれているが、それらの世界は、振動する時間性に応じた地平的図式によってテンポラールに構造化されている。『存在と時間』を中心とする思考圏にあって、こうした構造化は産出的構想力が脱自態の地平的図式を形成することによって行なわれるとハイデガーは見込んでいた。

ここで一度、「世界と図式」の関係にかんするさらなる究明のために、実存の側から世界の問題を検討しておきたい。

さて、『根本問題』では、「現存在の実存には世界内存在がぞくしている」(GA24, 391)と言われていた。「存在了解という光(Lichte)のなかでのみ、存在者は存在者としてわれわれに出会われる」(GA24, 390)のだが、この「われわれ」とは世界内存在という存在体制をそなえた現存在のことである。実存の側から世界という問題を検討することは、世界内存在と存在了解という光との関係を問うことである。存在了解が光だと表現されるそのわけをハイデガーは『存在と時間』のなかでこう述べていた。

> この存在者が《照らされている(erleuchtet)》とは、この存在者自身にそくして世界内存在として明るくされている(gelichtet)ということであり、別の存在者によってではなく、その存在者自身が明るみ(Lichtung)であるという仕方で明るくされているということなのである。実存論的にこのように明るくされた存在者にとってのみ、事物的存在者は光(Licht)のなかで近づきうるのであり、闇のなかでは隠されている。現存在はその現(Da)を初めからたずさえている…。(SZ, 133)

引用で語り出されている事態を時間性の次元からも特徴づければ、「脱自的な時間性は現を根源的に明るくしている」(SZ, 351)。だから、現存在は「明るみ」なのであり、現存在は「世界内存在として明るくされている」場、すなわち、「現(Da)」を与えられている。世界内存在という存在体制が存在了解の遂行を可能にしている。「超越とはみずからを或る世界から了解することを意味する」(GA24, 425)。実存の側からみた世界の問題は、以上のようなものである。

本節で検討していたのは、超越論的構想力が地平的図式を形成して世界のテンポラールな構造化を行なう仕組みであった。世界のこうした構造化と、世界のなかでの存在了解との関係をまとめて表現すれば、振動する時間性によってテンポラールに構造化された世界のなかではじめて現存在は存在者の存在を了解するということになる。実存の側からみれば、「存在了解という光のなかでのみ、存在者は存在者としてわれわれに出会われる」のであり、世界の側からみれば、「…世界進入が生起する場合にかぎり、存在者は存在者としてあらわになる」(GA26, 274)。世界へと進入するのは存在者であり、「時熟させる時間性が世界への進入の機会を与える」(GA26, 281)。存在者は或る世界のなかで現持の地平的図式を介して「〜のために」という存在意味を与えられ、現存在という目的性へと集約していく意味連関に組み込まれるわけである。

『始元根拠』の言葉で言えば、カントこそ、「時間との暗い連関のうちにあった超越論的構想力へとこのように初めて迫った」(GA26, 272)人であった。その暗さに対して、ハイデガーなりの超越論的哲学の光が当てられたとき、産出的構想力が形成した地平的図式による世界のテンポラールな構造化が照らし出されたのである。

四　時間と自由

『存在と時間』において時間との暗い連関にあるとされた相手は、〈私は考える〉という自己意識、つまり、超越論的統覚であり、その連関にかんする考察は『根本問題』をへて『カント書』において一つの結論に至る[6]。これに対して『始元根拠』では、時間と構想力とのあいだに暗い連関がみとめられていた。このような違いに応じて、『カント書』では対象性への存在論的超越が論じられ、『始元根拠』では世界への存在論的超越が論じられることとなる。しかしいずれにせよ、存在者が存在者としてあらわになることを可能にする存在論的超越が主題化され、この超越には脱自態の地平的図式が深く関与している。時間と超越をめぐる謎に答えうる豊かさをカントの図式論はそなえていたとハイデガーが考える所以である。しかも、この図式論をめぐる存在論的解釈は、ハイデガーがカントの「自己触発」概念を換骨奪胎して作りあげた時間性の自己企投という構造概念に裏づけられている。時間性の自己企投と脱自態の地平的図式との具体的関係を確かめなければならない。

カントの場合、自己触発とは自己認識のために超越論的統覚が内官を触発することであった。これとは異なり、ハイデガーは自己触発という発想を自家薬籠中のものとし、超越論的統覚が或る意味では内官の形式であったはずの時間そのものであり、その時間が自己触発すると言う。もちろん、カントにそくせば、超越論的統覚は時間の内部にはなく、時間は「主観の外では無」(A35 / B51)である。しかし、現存在の存在意味は時間性だと主張するハイデガーは、超越論的演繹論と図式論を彼独自の仕方で解釈し、超越論的統覚という仕方で存在する現存在と時間との根源的連関を見出していく。着目すべきは、超越論的統覚も時間も「同一の本質述語」(GA3, 192)を有する点である。つまり、超越論的統覚は「それ自体、変化せずに留まる」(A123)。また、時間は「留まり、変移しない」(A182 / B224)。両者はともにその本質が常住不変という同一性から説明される。時間は時間の内部にはなく、超越論的統覚も時間の内部にはない。それゆえ、ハイデガーの考えるところ、時間の内部にはない超越論的統覚は時間そのものであり、このことを手がかりに自己触発を自己企投へと改鋳していく。すなわち、超越論的統覚による内官＝時間の触発は時間の自己触発を意味し、時間性の自己企投なのである。ハイデガーはカントの自己触発概念を存在論的に解釈して自身の自己企投概念を練りあげ、現存在の存在意味である時間性の自己企投のことを語り出している[7]。

しかし、ここで注意しなければならない。「時間性は、将来・既在性・現持のそのつどの統一においてみずから時熟する(*zeitigt sich*)」(GA24, 376, vgl., SZ, 328)のであった。しかも、時間性の時熟による脱自的統一は本来的にも非本来的にも成り立つ。現存在は、地平的図式の形成という超越論的機能によって時間的に構造化された世界や対象性へと存在論的に超越するにしても、こうした超越論的機能を支えているのは、〈みずから時熟する時間性〉、すなわち、自己企投する時間性である(cf., GA24, 453)。だから、究極的には現存在のうちに超越論的機能の源泉が存してい

るわけではない。世界を時間的に構造化する超越論的機能の源泉は、現存在にではなく、時間性に求められたわけである。第三節で検討した産出的構想力の存在論的解釈もそれを示していた。

さて、超越の根源である時間性のこうした自己企投を主導するのは、将来という脱自態であった。これは脱自態の地平的図式にも当てはまり、こう述べられている。

> より適切に言えば、現存在の還帰性はそうした将来として構成される。…将来は、時間性がより根源的に将来的であればあるほど、いっそう還帰的である。こうした仕方で、時間性全体の構成とそのエクステーマ的地平の時熟が生起する。（GA26, 273）

時間性の脱自的で地平的な自己企投にもとづいて世界はテンポラールに構造化され、現存在はそうした世界から自身を了解していく。「現存在は、了解という仕方で自分自身から自分自身を豊穣にする存在者である」（GA26, 273）。では、現存在自身を豊穣にする了解とはいかなる了解であろうか。この問いに答えることで、ハイデガーの超越論的哲学において現存在に対して最大限に見積もられた超越論的機能―世界企投―の内実が判明する。

ハイデガーは上述の引用につづけて、「現存在はつねに、より-豊穣に-存在する、超えて-振動させられるという性格（Charakter des Reicher-seins-als, des Über-schwunges）をもつ」（GA26, 273）と述べている。ここで注目すべきは、「より-豊穣に-存在する」ことが「超えて-振動させられる」ことと等置されている点である。まず、超えて-振動させられるとは、世界への存在者の進入を生起させるような時間性の振動を現存在がこうむることを指している（cf., GA26, 270）。存在者は、時間性の地平的な時熟によって、世界のなかで現持の地平的図式を介して～のために（Um-zu）という存在意味を与えられ、自己のためにという目的性（Umwillen）へと集約していく意味連関に組み込まれる。この目的性は環境世界（Umwelt）の中心であり、そうした世界のテンポラールな構造化を行なう将来の地平的図式のことであった（cf., GA26, 246）。現存在はこうした将来の地平的図式へと自身を企投し、この企投こそ、世界のテンポラールな構造化にかかわる世界企投である。

したがって、テンポラールに構造化された世界が開かれることに現存在が世界企投という仕方で参与すること、これが「より-豊穣に-存在する」ことの意味である。

そして、そのように存在する現存在の「自由は原了解である」（GA26, 247）とハイデガーは指摘する。というのも、「自由があるところにのみ、目的性があり、世界がある」（GA26, 238）からである。現存在は将来の地平的図式である目的性へと自身をそのつど投げ込み、自身に固有の環境世界を開いていく。これは世界を固有化する現存在の「自己定立」である。それゆえ、世界企投は現存在の「自律」であり、現存在の自由なのだ。

小稿では最後に、ハイデガーのこうした自由概念をさらに究明したい。

さて、カント哲学にあって「実践的自由」とは、自己立法する意志にみとめられた、絶対的始まりをもたらす自由のことであった。

ハイデガーはこうした実践的自由を一九三一年夏学期講義『人間的自由の本質について―哲学入門―』のなかで存在論的に解釈し、その要点をこう述べている。「因果性が自由の一問題であってその逆ではないならば、その場合、存在一般の問題はそれ自体で自由の問題である」(GA31, 300)。ここで登場する自由とは実践的自由のことであり、それが因果性概念と比較されている[8]。ハイデガーの論じるところ、因果性は「物在としての存在という根本カテゴリー」(ebd.)に包含され、「諸対象の対象性の一性格」(GA31, 302)である。注目すべきは、因果性が事物的存在者の存在にかかわるカテゴリーであるのに対し、自由の問題は存在一般の問題だと指摘されている点である。この対比を超越概念の構図にそくして、つまり、時間性は存在論的超越を介して存在者的超越を条件づけるという構図にそくして考えてみよう。

まず因果性は対象性の一性格だから、これは存在論的超越の次元に位置づけられる。とすると、因果性が「自由の一問題」であるかぎり、自由は時間性の次元に位置する。「自由の問題」が存在一般の問題である以上、その時間性は存在のテンポラリテートを指している。

では、こうした関係に注目することでハイデガーはテンポラリテートにかんするどのような事柄を強調しようとしていたのか。

道徳法則の自己定立という自律を別名とした実践的自由によってハイデガーが言い当てようとしていたのは、時間性の地平的な自己企投という自己関係構造のことである。すなわち、自己定立という自律と時間性の自己企投とが重ね合わせられ、この意味で時間性それ自体の根源的自由が語り出されている。地平的に自己企投する時間性はみずから絶対的に始まり、そうした自己企投が現存在という場で遂行されていく。ハイデガーはこう述べている。

世界はそれがいかなる存在するものでもないという意味で無である。いかなる存在するものでもないと同時に、それが与える(es gibt)何かである。このように存在しないものを現(da)へと与える〈それ〉は、それ自体では、存在しているのではなく、みずから時熟する時間性である[9]。

世界は地平的に自己企投する時間性によって現存在へと贈与されるわけである。とはいえ、将来の地平的図式である目的性へと現存在が自身を投げ込んでいくかぎり、ハイデガーの超越論的哲学において世界形成は現存在の世界企投を呼び込んでいる。このとき、存在者が存在者としてあらわになる世界や対象性という存在論的地平を形成することに現存在は参与し、ここに現存在の存在論的な自由が成り立っている。

*

「現存在の実存論的分析論」(SZ, 12)とは考察の方向を変えながらも、存在のテンポラリテートをめぐる議論が検討の材料とした『存在と時間』の環境世界概念は、日常性における用具連関をモデルとしていた(cf., GA24, 431f.)。その日常性は「非本来的な歴史性」(SZ, 391)であることを思えば、また、のちの「用象(Bestand)」の視点からみても、そうした世界概念自体が存在論

の歴史からすでに規定されている[10]。とはいえ他方で、ハイデガーの超越論的哲学はそうした存在論の歴史を解体しようと試みていた。この試みのなかで彼の超越論的哲学は、存在論の歴史を上空飛行的に眺めているのではなく、その歴史へと循環的に入り込んでいる。こうした事態をハイデガーの超越論的哲学の言葉で言い換えれば、現存在に開かれる世界は、脱自的時間性の地平的図式によるテンポラールな構造化から歴史的に規定されていたということになる[11]。

しかし、世界への超越の根拠を時間性へとつきつめたハイデガーの超越論的哲学こそ、すでに世界へと投げ込まれている人間に対して世界形成の力を与え返していく近代超越論主義が、限界にまで徹底された現場であった。すなわち、被投性への透徹した眼差しをもちながら、ハイデガーは、世界が開かれることの始まりに現存在が世界企投によって与かる仕方を解き明かし、「現存在は自由なものとして世界企投である」と述べるに至った。

自己のためにという目的性である将来の地平的図式へと現存在が自身を投げ込んでいくこと。それは、彼のカント解釈という近代超越論主義の極限態において、世界形成に参与する力の最大限としてきわめられた現存在の存在論的自由なのである。

註

SZは二ーマイヤー版『存在と時間』、GA～はクロスターマン版ハイデガー全集の巻数を示し、つづけて頁数を記す。カント『純粋理性批判』は慣例にしたがい、第一版をA、第二版をBで示し、つづけて頁数を記す。また、訳文を作成するさい、既存の訳書を参照させていただいた。

(1)ハイデガーの「超越論的な学」とは「存在の対象化」にむけた歩みのことであり、「テンポラールな学」とも呼ばれる(GA24, 460)。

(2)M. Heidegger, *Die Technik und die Kehre*, Neske, SS. 39-42. ハイデガーによる「転回の思索」にかんしては、細川亮一『意味・真理・場所―ハイデガーの思惟の道―』(創文社、一九九二年)の第一章第二節を参照。

(3)『存在と時間』第九節「現存在の分析論の主題」においてハイデガーは本質存在と現実存在という伝統的な存在論的術語をもちいつつ、しかし独自の視点から、「こうした存在者の何であるか(本質存在)は、…その存在者が在ること(現実存在)から把握されなければならない」と述べていた。とはいえ、この現実存在は、ハイデガーの考えるところ、「存在論的には物在と同じ」であり、それゆえ、「現実存在という名称の代わりに…物在性という表現をつねにもちいる」と記される。さらに、ハイデガーは物在性と「カテーゴレイスタイ(*κατηγορεῖσθαι*)」の関係を指摘し、「実存カテゴリーとカテゴリーは諸存在性格の二つの根本可能性である」が、わけてもカテゴリーが適用されるのは、「何が(最広義での物在性)」を問われる存在者であると言う。

ここから判明するのは、本質存在と現実存在という存在の伝統的な根本概念はともに物在だと解釈されていることである。特に本質存在にかんしては、カテーゴレイスタイとの関係が指摘され、「存在者を論じあう(*λόγος*)さいに存在をそのつどすでに先行的に論じていることが、カテーゴレイスタイである」と述べられている。つまり、存在者の何かを語りだすとき、カテーゴレイスタイはその存在者のア・プリオリな諸規定である。

以上のように、本質存在と現実存在という伝統的な存在概念は、古代ギリシアからさしあたりカントに至るまでを貫いている。

(4)GA3, §35. ハイデガーによる構想力解釈を批判しながら、カント哲学に内在しつつ構想力について論じたものとして次の論考を参照。D. Henrich, "Über die Einheit der Subjektivität", in : *Philosophische Rundschau* 3, 1955.

(5)GA3, 106. カント『第一批判』に内在的な実体概念の解釈については次の著作を参照。A. Rosales, *Sein und Subjektivität bei Kant*, de Gruyter, 2000, S. 240ff.

(6)拙稿「認識論的転回の地平を求めて―ハイデガーとカント『純粋理性批判』―」(日本哲学会編『哲学』、第五六号、二〇〇五年、二七〇頁から二八二頁)を参照。

（7）細川亮一『意味・真理・場所―ハイデガーの思惟の道―』（創文社、一九九二年）の一四二頁から一四九頁を参照。

（8）ハイデガーの『人間的自由の本質について―哲学入門―』および『存在と時間』の自由概念を検討したものとして、ジャン＝リュック・ナンシー『自由の経験』（澤田直訳、二〇〇〇年、未来社）の第二章を参照。

（9）GA26, 272. 世界への存在論的超越を可能にする時間性はそれ以上の根拠をもたず、いわば底が抜けた「無底（Abgrund）」の次元だと言える。それゆえ、「時間性というものがとにかく与えられていることは（Daß es überhaupt so etwas wie Zeitlichkeit gibt）、形而上学的な意味での原事実である」（GA26, 270）と述べられている。

（10）『存在と時間』第七五節を参照。また、『存在と時間』第六節「存在論の歴史の解体という課題」では、「ギリシア存在論およびその歴史は…、現存在がおのれ自身と存在一般を《世界》から了解していることの…証左である」（SZ, 21f.）と述べていた。こうした事態をハイデガーは『存在と時間』の術語を交えて次のように描き出している。

> ギリシア人たちは《事物（Dinge）》のためにプラグマタ（πράγματα）という適切な術語をもっていた。それは、ひとが配慮的な交渉（πρᾶξις）においてかかわるものである。彼らは…《さしあたり》プラグマタを《単なる事物》として規定している。われわれは配慮において出会われる存在者のことを道具と名づける。（SZ, 68）

（11）この引用からもわかるとおり、『存在と時間』の用具連関という発想の由来の一つはギリシア存在論にある。

『始元根拠』においてハイデガーが『存在と時間』の「基礎存在論」を説明するところ、それは「現存在の分析論」と「存在のテンポラリテートの分析論」からなり、「このテンポラールな分析論は、しかし同時に、転回である」（GA26, 201）。『存在と時間』においても現存在から存在への転回はなされていたが、しかし「転回の思索」は試みられていなかった。

付記：小稿を作成するにあたり、コメントを下さった方々に深謝します。